

連合艦隊西進す4

地中海攻防

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 佐藤道明
地 図 ・ 図 版 安達裕章
編 集 協 力 らいとすたつふ

目次

第一章	北アフリカの「飛び石」	9
第二章	北の「ゲルニカ」	47
第三章	棒十字の英国機 <small>バルカンクローイツ</small>	67
第四章	シチリア強襲	109
第五章	地中海の魔王 <small>エルケーニツヒ</small>	155
第六章	失墜の日	205
あとがき		216



地中海東部拡大図





連合艦隊西進す 4

地中海攻防

第一章 北アフリカの「飛び石」

1

スエズ運河の周辺は、朝からものものしい雰囲氣ふんいきに包まれていた。

兩岸にはイギリス軍と日本軍の兵士が立ち並び、市民の接近を許さない。

ポートサイドの港湾施設も同様だ。

港外にも、多数の掃海艇そうかいてい、駆潜艇くせんていが展開している。海面付近の低空では、水上機が飛び回り、海中から接近を囂はかる敵に目を光らせていた。

「あんなことをすれば、重要な艦が入港することを内外に宣伝するようなものだ」

イタリア海軍少佐ニコロ・キーオは、運河に双眼鏡きょうを向けながらほくそ笑んだ。

キーオは、ポートサイドの枢軸軍すうじくぐんが連合軍に降伏した後、市内に潜ひそんだ残置諜者ざんちちようしやの一人だ。

イギリスの貿易商の身分を偽いつわり、連合軍の情報収

集に当たっている。

現在、身を潜めているのは、運河の真西にある集合住宅の四階だ。窓からは、運河を南北に見渡せる。市街戦による損傷が大きく、人が住める状態ではないが、取り壊しは始まっていない。

キーオは、この日早朝から始まった連合軍の動きを見て、「重要な艦がポートサイドに入港しようとしている」と直感し、割れたまま修理もされていない窓から運河を見張っていたのだ。

「あれか！」

現地時間の一〇時二〇分、キーオは思わず口笛を吹き鳴らした。

一際目立つ艦が二隻、運河を北上している。

上部構造物、特に艦橋かんきょうは、運河の周辺に立ち並びビルやモスクよりも高い。

「リットリオ級よりもでかそうだな」

二ヶ月前のアブキール湾海戦（アレキサンドリア沖海戦のイタリア側公称）で沈んだ最新鋭戦艦のクラ

ス名を、キーオは口にした。

リットリオ級戦艦は、全長二二四・五メートル、全幅三二・九メートル、基準排水量四万一一六七トン。それまでの主力だったアンドレア・ドリア級、コンテ・デイ・カプール級よりも一回り大きく、盟邦ドイツのビスマルク級と比較しても遜色ない。

出現した二隻は、そのリットリオ級を凌ぐ巨体を持つ。

火力、防御力も、リットリオ級を上回ると見なければならぬ。

「長門」「陸奥」の四〇センチ主砲を上回る砲か。あるいは、四〇センチ砲を「ナガト」「ムツ」よりも多数装備しているのか。

キーオは、スエズ運河を望む窓から離れた。

地中海に出現した強力な戦艦の情報を、本国の総司令部に伝えねばならない。

「連合艦隊長官が、御自ら『大和』『武蔵』を回航されるのは驚きましたな」

遣欧艦隊司令長官小林宗之助中将は、内地からポートサイドまで足を運んだ連合艦隊司令長官山本五十六大将に言った。

一九四三年七月一日。

連合艦隊旗艦「武蔵」の長官公室だ。

山本と首席参謀黒島亀人大佐ら幕僚数名が顔を揃えている。参謀長の宇垣纏中将は、長官の代行を務めるため、内地に残留している。

「武蔵」には小林の他、参謀長白石万隆少将、作战参謀芦田優中佐、航空参謀天谷孝久中佐らの司令部幕僚と、英国本国艦隊司令長官のジェームズ・ソマーヴィル大将、参謀長フレデリック・サリンジャー少将らが参集していた。

「目的は、前線視察と打ち合わせだ。『大和』と『武蔵』は、そのついでに運んで来ただけだ」

山本は、ニヤリと笑って見せた。

遣欧艦隊の幕僚たちは、驚きと賛嘆の入り交じった表情を浮かべた。

「大和」「武蔵」は、軍縮条約明け後に帝国海軍が満を持して送り出した、世界最大最強の戦艦だ。今後のドイツ、イタリアとの戦いでは、切り札となる艦なのだ。

その艦の回航を、山本は「ついでのこと」と言つてのけたのだ。

「内地から既に情報が届いていると思うが、東京で連合軍総司令部が設立された。我が国の大本営と大英帝国正統政府隷下の最高幕僚会議を統合した戦争指導機関だ。今後は連合軍総司令部が戦略を定め、遣欧艦隊も、英本国艦隊も、それに従って動いて貰うことになる」

山本は、話を切り出した。

「総司令部は協議の結果、戦争が新たな段階に入ったと判断している。旧大本営が定めた、第二段作戦が終了したものと認め、第三段作戦を開始すべきと

きが来た、と」

山本が「第三段作戦」の一言を口にしたとき、長官公室の空気が張り詰めたように感じられた。

旧大本営が定めた第二段作戦の目標は、紅海の制圧とエジプトの奪回。

第三段作戦の目標は、地中海の制圧と枢軸国の一員であるイタリアの打倒だ。

これまでは、敵の本国から遠く離れたインド洋や紅海、北アフリカが戦場になっていたが、今度は敵の本国を直接叩くことになる。

「エジプトは連合軍が完全に制圧しており、枢軸軍が再侵攻して来る可能性もない。よって、戦争は次の段階に移行する、ということですか？」

「その通りだ」

確認を求めた小林に、山本は頷いて見せた。

五月七日にポートサイドが陥落した後、枢軸軍はエジプト最大の要港アレキサンドリアに兵力を集結させ、同地を死守する構えを取った。

アレキサンドリアはエジプトの枢軸軍にとり、本国からの補給を受けるための唯一の窓口だ。

この地を陥とせば、枢軸軍はイタリア領リビアに撤退するしなくなる。

枢軸軍もまた、イタリア本国のタラント軍港からアレキサンドリアに向け、増援部隊と補給物資を送り出した。

輸送船団を巡って、四回に亘る海戦が生起し、連合軍は軽巡二隻、駆逐艦一一隻を失ったが、船団の阻止には成功した。

水上砲戦で撃ち漏らした輸送船は、アレキサンドリア沖に潜む伊号潜水艦の雷撃や、基地航空隊の雷爆撃によって撃沈し、入港を許さなかった。

同時に、英国陸軍の第八軍が東方からアレキサンドリアを攻撃し、枢軸軍を圧迫した。

増援も補給も届かない状況下、アレキサンドリアの枢軸軍は消耗する一方であり、六月一九日、同地を放棄して、イタリア領リビアに撤退していった。

ほぼ同時期、エジプトの首都カイロに立てこもっていた枢軸軍も、白旗を掲げた。

カイロを守っていたイタリア軍は、アレキサンドリアを通じて本国からの増援と補給を受けている。そのアレキサンドリアが陥落した以上、抵抗は不可能と判断したので。

カイロの枢軸軍が降伏した時点で、北アフリカの地上戦闘を担当する陸軍北阿弗利加方面軍と大英帝國中東方面軍は、エジプトの完全制圧を宣言した。

第二段作戦の目標は、ここに達成された。

連合軍は、新たな、そしてより困難な目標に向けて前進するのだ。

「地図を見れば一目瞭然だが、イタリアは地中海を東西に二分する位置にある」

山本は、机上に広げられた地中海要域図を指示棒で指した。地図上では、連合軍と枢軸軍の勢力範囲が色分けされている。

「イタリアを降伏か中立化に追い込まねば、地中海

の西側には進めぬ。その先にある英本土にも手は届かぬ。イタリアの打倒は、英本土の奪回に不可欠なのだ」

「作戦は、次のような手順で進めていただきます」

黒島亀人連合艦隊首席参謀が起立し、地中海要域図に指示棒を伸ばした。

エジプトとリビアの国境線に近いトブルクを指し、陸伝いに西へとなぞった。

リビアの西端に近いトリポリで一旦止め、一足飛びにシチリアへと飛ばした。

「第三段作戦は、リビア、シチリアの順で攻略します。シチリア占領後に基地航空隊を進出させれば、イタリア本土のほぼ全域が、我が方の攻撃圏内に入ります」

黒島は、シチリア島北西部のパレルモを中心に、半径五〇〇哩の円を描いた。

イタリア全土のみならず、スイス領の一部までが含まれる。

「イタリア本土を直接叩くのですか？」

「その御質問には、私がお答えします」

小林の問いに、ソマーヴィルが返答した。

「イタリアに対しては、大英帝国正統政府が水面下での接触を図り、ドイツとの離間工作を仕掛けています。連合軍がシチリアを占領し、イタリア本土のどこでも叩ける態勢を作れば、同国は降伏乃至中立の道を選ぶ可能性が高い、と我が国政府は睨んでおります」

「イタリア本土に進攻するとなれば、我が方も相当な犠牲を覚悟しなければならぬ。軍だけではなく、イタリアの民間人にも多数の死傷者が生じる可能性が高い」

山本が、ソマーヴィルの後を受けて言った。

「それだけではない。同国には、貴重な文化遺産が多い。古代ローマ帝国の時代から連綿と受け継がれて来た史跡や、ルネサンス時代の建築、美術品を破壊するようなことがあれば、我が国も、英国も、文

化遺産の破壊者として歴史に悪名を残す。できるだけ、イタリア本土を戦場にする事なく、同国を切り崩したいのだ」

山本は一旦言葉を切り、あらたまった口調で言った。

「陛下も、イタリアの民間人や文化遺産に戦火が及ぶことを憂慮されている。私はエジプトに来る前、宮中に参内したが、『イタリアの民間人や文化遺産に被害が生じぬよう、極力配慮して欲しい』とお言葉を賜った。臣として、陛下の御意志は尊重しなければならぬ」

「陛下」の一言を山本が口にしたとき、英国海軍の幕僚を除く全員が姿勢を正した。

「ソマーヴィル提督が言われたように、外交交渉によつてイタリアを屈服させることができれば、陛下の大御心にもかなう、ということですか？」

「その通りだ」

小林の問いに、山本は頷いた。

「戦争にせよ、外交交渉にせよ、相手があることです。こちらの目論見通りに運ぶでしょうか？」

「その点につきましては、イタリアの国内事情について、お話しする必要がありますでしょう」

白石参謀長の懸念に、英本国艦隊のサリンジャー参謀長が応えた。

「イタリアが今回の戦争に参戦した動機は、ドイツの勝利に便乗しての領土拡大、特にエジプトの併呑と地中海全域の内海化だと考えられて来ました。それは間違いではありませんが、戦争事由の一つではありません。実際には、独裁者ベニト・ムッソリーニの、ヒトラーに対する見栄と意地が、より大きな動機です」

「そんな個人的な動機で、一国家が戦争という重大事に踏み切るものでしょうか？」

「ドイツやイタリアのような独裁国家では、国家指導者個人の意志が国家の意志となります。元々ムッソリーニには、国家社会主義の思想面においては、

自分の方がヒトラーよりも先輩だ、という意識がありました。実際問題として、国家ファシスト党が政権を握り、ムツソリーニが統領の地位に就いたのは、ドイツで国家社会主義ドイツ労働者党が政権を握るよりも早かったのですから。ですが政治家としての実績では、ムツソリーニはヒトラーの後塵を拝しました。ドイツがオーストリア、チエコスロバキアの併合、ポーランドへの侵攻、西ヨーロッパ諸国への電撃戦で、瞬く間に領土を拡張していったのに対し、イタリアはアフリカで若干の領土拡張を行っただけですが、ムツソリーニとしては、当然面白くない。自分も国家の指導者として、決してヒトラーに劣るものではないはずだ。そのような意識から、この戦争に参戦し、エジプトやバルカン諸国への侵攻に踏み切ったのではないかと、我が国政府は見ておりません。

「何だか、友だちと張り合おうとしている子供のようですね」

「左様。ムツソリーニという人物は、わがままな子供に類似した性格の持ち主です。そのような人物の意志が、国家の政策に反映されてしまうところに、独裁国家の怖さがあります」

「イタリア国民は、わがまま坊やの見栄と意地で戦争に駆り出されたわけですか」

小林が、呆れたようにかぶりを振った。

イタリア国民にとつては迷惑極まりない話だ、と言いたげだった。

ソマーヴィルが、小林の言葉に応えた。

「イタリア人、特に政府や軍の要人の中には、そのことを理解している人々もいます。イタリアの戦争は、ムツソリーニの個人的な感情によって引き起こされたものだ、と。北アフリカで戦ったイタリア軍の戦意が全般的に低かったのも、彼らが戦争事由を理解していたためではないかと、我々は考えております」

白石が新たな疑問を提起した。

「遣欧艦隊が戦ったイタリアの海軍部隊は、戦意が低いようには見えませんでしたか？」

「彼らはムッソリーニのためではなく、北アフリカで頑張っている友軍のことを第一に考えて、戦ったのではないでしょう？ 海軍と陸軍の垣根はあれど、エジプトのイタリア軍部隊は、イタリア海軍の将兵にとり、戦友であると同時に同胞でもあるのですから」

サリンジャーが答え、少し考えてから付け加えた。「イタリア人の名譽のために申し上げておけば、彼らも祖国の自由や独立が犯されるとなれば、死に物狂いで戦うでしょう。この戦争はムッソリーニ個人のための戦争であり、祖国の自由や独立を守る戦争とは縁遠いものだった、ということですよ」

「貴国政府が水面下で交渉している相手は、イタリア国内の反体制派ということですね？ ムッソリーニに繋がる人物ではなく」

白石の問いに、サリンジャーが頷いた。

「おっしゃる通りです」

「貴国は、イタリア国内での反乱を使囀しておられるのですか？」

「ムッソリーニが交渉相手にならないのであれば、排除する以外にありません」

「そのためにも、リビア、シチリアの占領が必要なのだ。イタリアに、圧力をかけるためにな」

重々しい声で言った山本に、小林が確認を求めた。

「イタリアは、極力外交交渉で枢軸国から脱落させる、ということですか？ 我が軍は、その条件を整えるため、リビア、シチリアに進攻するのだ、と」

「その通りだ。GFとしては、後方から口を出すような真似はせぬ。遣欧艦隊が最善と考える方法で、進めて貰いたい」

小林は、晴れ晴れとした表情になった。

「作戦目的が明確になった以上、迷いはありません。陛下の大御心にもかなうのであれば、我が遣欧艦隊は、全力を尽くすのみです」

2

「正面上方、敵機！」

無線電話機のレシーバーに、指揮官の声が入った。

第三段作戦の開始に先立ち、航空母艦「大龍」の艦戦隊長に任じられた熊野澄夫少佐の声だ。

「大龍」艦戦隊の第二小隊長桑原寿中尉は、前方を見た。

羽虫の群れを思わせる、黒い小さな影が多数、押し被さるように接近して来る。

「おいでなすったか」

桑原は、唇の端を僅かに吊り上げた。

昭和一八年八月一日。

イタリア領リビアの東部に位置する要港トブルクの沖だ。迎撃機の出現は想定している。

「全機、続け！」

熊野が叩き付けるように命じ、先頭に立って上昇

を開始した。

熊野が直率する第一小隊が上昇に転じ、桑原も縦桿を手前に引くと同時に、エンジン・スロットルを開いた。

エンジンが咆哮し、機体が増速を開始する。

開戦時に搭乗していた零式艦上戦闘機の倍以上の重量を持つ機体だが、鈍重さは全くない。二〇〇〇馬力の離昇出力を持つ米国製エンジンと大直径のプロペラが、太く逞しい機体を、ぐいぐいと高みに引っ張り上げる。

敵編隊も、高度を下げつつ距離を詰めて来る。

全体にほっそりしており、液冷エンジン機に特有の、尖り帽子のような機首を持つ。

全体が黄土色に塗装され薄墨色で紋様が描かれている。北アフリカの砂漠地帯に合わせた、迷彩塗装のようだ。

対独開戦以来、何度となく手合わせしたドイツ空軍の主力戦闘機メッサーシュミット B f 109 であ

ろう。

ざっと見たところ、敵の機数は七、八〇機。

日本側は、第四航空戦隊の「大龍」「神龍」から

三六機ずつ、合計七二機が出撃している。

数の上では、ほぼ互角だが――。

(どこまで通じるか)

乗機の動きに身を委ねながら、桑原は呟いた。

「大龍」「神龍」の艦戦隊が装備するのは、米国よ

り導入した新型艦上戦闘機「炎風」だ。

米国海軍では、グラマンF6Fヘルキャット

の名で制式採用され、母艦戦闘機隊への配備が進んでいる。

ただし、米国は中立政策を採っているため、開発国ではまだ実戦経験がない。

トブルクへの第一次攻撃は、炎風の実戦テストを兼ね、戦闘機のみの出撃となっていた。

桑原は、計器盤と正面を交互に見た。

高度計の針が右に回り、Bf109との距離が詰

まる。下方から見上げる敵機は、鋸のようだ。

桑原の第二小隊に、Bf109が向かって来た。

機数は四機。二小隊と同数だ。海軍戦闘機隊は、

開戦当時は一小隊三機の編成だったが、ドイツ空軍への対抗上、四機編成に改めている。

敵一番機の機首に発射炎が閃いた。ほとんど同時に、桑原も発射ボタンを押した。炎風の主翼前縁から、六条の火箭が放たれた。

炎風の兵装はブローニング一二・七ミリ機銃六丁。多数の機銃から、目標に網を投げるように発射する。

両翼二丁の二〇ミリ機銃から、破壊力の大きな銃弾を発射する零戦とは対照的だ。英国のスーパーマリン・スピットファイアが採用していた、小口径多銃方式と共通するよう感じられる。

彼がの火箭が、斬り結ぶように交錯するが、互いに命中はない。

Bf109も、炎風も、射弾をばら撒いただけに終わる。

二機目と銃火を交わすが、結果は同じだ。彼我共に命中弾を得られないまま、猛速ですれ違う。

小隊同士の交戦は、互いに戦果なしに終わる。

息つく間もなく、新たなBf109が右前上方から襲って来る。

今度は、急降下攻撃だ。同じドイツのユンカースJu87のように、逆落としに突っ込んで来る。

桑原は咄嗟に左旋回をかけ、前沢稔上等飛行兵曹が操る二番機もそれに続いた。エジプトを巡る戦いが始まったときは一等飛行兵曹だったが、現在は上等飛行兵曹に昇進している。

炎風は、零戦よりも太く、鈍重そうに見えるが、動作は機敏だ。機体が大きく傾き、ぎりぎりのところで敵弾をかわす。

猛速で突っ込んで来たBf109が、急降下によって離脱したときには、第二小隊は二機だけになっている。

後続機は、小隊長機とは逆に右旋回をかけたため、

はぐれたのだ。

「小隊長、後ろ上方！」

レシーバーに、前沢の声が響いた。

「宙返りだ。続け！」

桑原は一声叫ぶや、操縦桿を手前に引いた。

炎風が機首を上向け、急角度で上昇に入った。

Bf109も桑原機を追って、宙返りに入る。

桑原機が背面状態になり、次いで急坂を滑り降りるように水平に戻る。

前上方に、二機の敵機が見える、手前の機体は、

二番機のようにだ。

桑原は、二度目の宙返りに入る。

Bf109の二番機を追う形で、機体が大きな円弧を描く。

敵機が宙返りの頂点に達したところで、桑原は発

射ボタンを押した。

両翼の前縁が真っ赤に染まり、無数の青白い曳痕

が、上に向かつてほとばしる。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。